
柳条湖流連載式短編集

柳条湖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

柳条湖流連載式短編集

【Nコード】

N6077D

【作者名】

柳条湖

【あらすじ】

オチのある話、オチの無い話。さまざまなオリジナルの話詰め込んだショートショートノベル。笑いあり！（たぶん）涙あり！（可能性はある）冒険なし！（確実）の柳条湖の最新作！！

バレンタインゲーム（前書き）

一話完結式のオムニバス形式で綴って行きます。
ショートショートが嫌いな方はどうぞ素通りを。

バレンタインゲーム

そこには六人の少年が集められた。

皆、期待で溢れんばかりの輝かしい表情をしている。

そう、今日はバレンタイン。

集められた少年達は、皆一つもチョコレートを貰っていない。

そんな絶望を感じた放課後、下駄箱の中に手紙が入っていたのだ。

『放課後、一年A組の教室にて手作りのチョコレートをお渡しいたします。』

今日、一つのチョコレートも貰っていないあなたへ。

by 某少女』

正直なところ引かかる内容ではあるが、貰えるなら文句は無い。

少年A「おい！本当に貰えるのかよ！？」

少年B「さあね。どうでもいいでしょ？」

少年C「気の無い振りしてちゃっかり来てるwww」

少年D「我らは同士。」

少年E「いや・・・同類にされたくない・・・」

少年F「何にせよ、楽しみだ・・・」

言ってることは様々だが、思いは一つ。

『バレンタインデーに女の子から手作りチョコを貰いたい！！』

今、教室の中にいる少年達の想いは一つになったのだ。
ふとその時、教室の入り口の扉がガラリと開く。

入って来たのは三人の女子。

少女A「集まってますね？いいでしょう。」

そのうちの一人が声を出す。

女性らしく高い、しかし決して聞こえの悪くない声。

その容姿も三人とも素晴らしく美しいと言えるだろう。

少年D「ハアハア何とも・・・リアル女萌え」

少年C「新しいジャンルか？」

少年E「今言うべきはその言葉じゃない・・・」

少年F「そうそう。今肝心なのは・・・」

少年B「チョコレートだ！」

少年A「この手紙に嘘偽り無いか？」

そう言って一人の少年が手紙を見せる。

少女B「ええ、本当よ。」

少女C「どうやら本当に六人全員来た様ね？これなら行えるわ。ク
スクス」

少女A「ではこれより、『バレンタインゲーム』を行います。」

少女が大々的に発表する。

少年C「は？チョコレートをくれるんじゃないの？」

少年F「まさかゲームで勝った人だけなんて言わないよね？」

少年D「私！チョコレートの為なら命を賭けたゲームでも参加しま
す！！」

少年A「冗談じゃないぞ・・・」

少年E「手紙は嘘だったのか？」

少年B「そんなぁ・・・」

少年達は口々に文句を言い始める。

少女C「ご安心ください。」

少女B「ちゃんと全員にチョコレートをお渡しいたします。」

少女A「ゲームと言っても、この箱の中から一人一つ選んで貰うだけですから。」

そう言って少女は、可愛らしく包装してある筆箱大の箱を見せる。

少年F「何だ・・・」

少年B「心配して損したよ・・・」

少年D「ゲームではないのですか・・・」

少年A「安心したぜ。」

少年E「ほんと、安心安心w」

少年C「じゃあ選ばしてくれよ。」

その言葉を聞くと同時に、少女は箱の蓋を開ける。

中には、丁寧に形作られ、綺麗に彩られ、そして美味しそうなチョコレートが六個並んでいた。

少年達「」「」「」

おお!!!!!!

」「」「」

少年達から感嘆の声が漏れる。

少女A「一人一つお選びください。」

少女B「ただし口に入れるのは少し待ってください。」

少女C「全員が選び終わった後、皆で同時に口の中に入れてください。」

そして、少年達はチョコレートを一人一つ選んだ。

少女A「では・・・」

少女B「どうぞ・・・」

少女C「お食べください。」

少女達は手で食べるように勧める。

少年達「」「」「」　　せーの！！

「」「」「」

パクリ、という音がした気がした。

少年A「うぎやああああああ！！！！なんだこれえええええええええ！！！！！！」

少年B「美味い！！！！こんな美味しいチョコレートは久しぶりだ！！！！！！」

少年C「うぎやああああああああ！！！！なんだこれええええええええええ！！！！！！」

少年D「うぎやああああああああ！！！！なんだこれええええええええええ！！！！！！」

少年E「美味い！！！！こんな美味しいチョコレートは久しぶりだ！！！！！！」

少年F「うぎやああああああああ！！！！なんだこれええええええええええ！！！！！！」

感想は真っ二つに分かれた。

ちなみに、AとFが食べたチョコレートにはマヨネーズが、CとDが食べたチョコレートにはケチャップが入っていたのだ。

それらの感想を聞いた少女達は、その場で腹を抱えるほど笑い転げ

た。

少女A 「クックスックスクス・・・こ、こここれにて」

少女B 「アハッハッハアアハ・・・バ、バレババババレンタイン」

少女C 「アハハハハWWW・・・ゲームを終了します。」

これにてバレンタインゲーム終了。

あなたもやってみる？

俺と友達の話…ラーメン屋にて

俺には友達が一人いた。

小学生時代から仲の良い友達だ。

親友と言っても彼は否定はしまい・・・

俺もそのいつも冗談が好きだった。

事あるごとに冗談をかまし、周囲を笑わせた物だ。

そんな、俺と友達の一つの話。

☆

店員「いらっしやいませ」

聞こえの良い声が店内に響く。

俺と友達は高校の放課後、近所のラーメン屋に立ち寄った。
感じのいい空腹感が二人を襲った為だ。

店員「こちらへどうぞ。」

俺と友達はカウンターの席へ案内される。

そして、俺達二人は並んで座った。

店長「いらっしやい！何にしますか？」

先程とは違う威勢のいい男が俺達の前に現れる。

見た目の風格や纏っているオーラからこの店の店長だろうと当りを
つける。

俺「どんこつラーメン大盛りで。」

ラーメン好きの俺がいつも決まって頼むのはこれ。
さて俺の友達は・・・

友達「じゃあ俺もどんこつ大盛り。それとビール。」

なんと俺の友達はこの場所でボケおった・・・

店長「はいよ。キリ●とア●ヒどちにしますか？」

友達「じゃあキリ●で。」

店長「はいはい。グラスはお二つで？」

まさかこの店長は本気にしたのではあるまいな？

しかたない・・・

俺もボケさせていただろう。

俺「店長さん、俺は飲まないが、こいつはこうやって飲むから
グラスは二つくれ。」

俺はグラスを片手に一つずつ両手で持ち、それを同時に口に運んで飲むジェスチャーをする。

友達は少し驚いた顔をしたが、すぐに意図に気付いた様子で、

友達「そうそう。だから二つ宜しく。」

乗ってきた。

店長「はいよお！おいしい！！どんこつ大盛り二丁とビールキリ●
一丁！！！！」

そう叫ぶと店長は店の奥へと消えた。

友達「おいおい・・・冗談だってわかってるよな？」

俺「大丈夫だろ・・・俺達、学生服着てるんだぜ？」

十分ほどして店長が戻ってきた。

店長「はいお待ちい。とんこつ大盛り二つとビールキリ●グラス二つね？」

どうやら店長は本気にしたらしい。

店長は俺らから離れた。

がしかし、なんと大いに期待した顔でこちらを見つめているではないか!!!?

友達「どうしよう・・・これ・・・」

俺「どうもこうも行くしかないだろう？それこそKYって奴だ。」

友達「お前・・・ツマラン言葉知ってるな・・・」

俺「ほら行けよ。店長さんがワクワクしてるぜ？」

友達「ちくしょーよし！不詳俺！！行かせて頂きます！！！！」

友達はそう言うのと、グラス二つにビールを注ぎ、それを両手でガシッと掴み・・・そして！！

—ゴクッ！！ゴクッ！！—

聞くだけでも美味しそうな音を立てて飲み始めた。

口の端からはビールが一筋垂れているが、そこは俺の友達の男を立てて言わないことにする。

友達「プハア！！美味い！！！！」

俺「よかったなwwww」

勘違いされないように言っておくが、普段から俺達二人はこんなことをしてるわけではない。

酒を飲んだのだって初めてのはずだ・・・たぶん・・・

店長「うおおおおおおおおお！！！！」

こっちの気も知らないで、店長は興奮して拍手までしている。

俺「いい経験が出来たな。」

友達「もうやらん・・・」

こうして俺達二人の仲は一層深くなった（と思う）。

ちなみに、後日このことがとあるルートで学校にバレて、俺の友達は一週間の停学を喰らう。

ついでに言うと、止めなかったと言うふざけた理由で俺も一緒に一週間の停学を喰らう破目になるのだった。

究極！1／2理論

この世には確立が存在する。

それは如何なる事であっても存在する。

例えば、あなたの目の前にPC（または携帯電話）がある確立100パーセント。

この様に、日常の些細な事であっても、100や0といった数字で確率化できるのだ。

だが、私が言いたいのはそういう事ではない。

私が独自に考え、独自に編み出した理論を、これを見ているあなたに聞いて（見て）欲しい。

まずは例を出そう。

サイコロがあるとする。

それを適当に転がし、1の目が出る確率はどれくらいだろうか？

それはすぐに分かると思う。

1／6だ。

出目が六個有って、その内の一個が出る確率だから当然だ。

『一から六までのいずれかの内の一つが出る内の、一の目が出る確率』という考え方をするから1／6という答えに行き着くのである。この考え方が当然であり常識だ。

学校でもこのように習うだろう。

しかし、これを『一の目が出る』という事象に着目して考えると、実はそうでも無いのではないかと言う思想に行き着きはしないか？私は行き着いた。

すなわち、『一の目が出るか出ないか』という考え方をするのである。

そう、確立はあくまで確立であって、何回もの試行を重ねたと仮定した場合の上に成り立つ机上の空論なのである。

実際の一回の試行においては、上記の通り、『一の目が出るか出ない

いか』というこれだけが考えるべき結果なのである。

つまり、この考え方において、『サイコロを適当に転がして一の目が出る確率』は $1/2$ という考え方が出来るのではないかと私は考える。

これが、例えば $1/10000000000$ という確立でも同様だ。

確かに、この事象を一億回繰り返しても、この試行の成功が期待できるのは一回のみだ。

しかし、試行が成功する確率がある以上、それはいつだって起こりえる可能性があるわけだ。

一回目に成功するかもしれない、二十回目かもしれない、もしかしたら一億回では成功しないかもしれない。

しかし、成功する可能性はあるわけだ。

すなわち、その試行を行う一回目のみ、あらゆる試行の成功の可能性は『成功するか失敗するか』という $1/2$ の確立となるのが理解いただけるだろうか？

これを考えれば、次のような考え方にも行き着くと思う。

『この試行が二回連続で成功するかしないか』・・・確立 $1/2$

『この試行が三回連続で成功するかしないか』・・・確立 $1/2$

しかし、実際にこの事象が起こる可能性を考慮するととんでもない数字になる。

『この試行が二回連続で成功する確立』・・・ $1/100000000$
 0000000000

『この試行が三回連続で成功する確立』・・・ $1/1000000000$
 00000000000000000000

これがどれ程のことか理解できるだろうか？

だからこそ、気休めとも思えるこの理論を、私は広めたい。

所詮世の中は『その事象が発生するかしないか』という $1/2$ の確立の上に成り立っているのである。

面接試験の話

高等学校入学試験には、（地方によって違うかも知れないが）面接試験というものがある。

この面接試験はさまざまな子供達が受ける。

とても丁寧な離し方をする子もいれば、わざわざ『タメ口で言いか？』などと訊いてくる子供もいる。

そんな様々な子供がいる中で、特に他から掛け離れていた子供が一人いた。

これは、その子供の面接試験の様子。



—コンコン—

静かな空気が流れていた教室に入室の許可を求めるノックが響く。

「どうぞ。」

試験官は一言と共に入室の許可を出す。

—ガラガラ・・・ガラガラ、ピシャツ—

扉を開け中に入った少年は、扉を閉めると一礼し、椅子の横へ着き再び礼をする。

「お掛けください。」

「はい。」

これは面接試験。

高等学校へ入学する為の一つの関門である。

この学校の面接試験の形式はワンツーマン、つまり一対一である。

少年は椅子に座った。

「出身中学、受験番号、名前を教えてください。」

「●●市立××中学校出身、受験番号■■■■、▲▲▼▼。」

少年は単刀直入に、生気のこもらない声で言った。

「では、▼▼君。我が校の志望動機を教えてください。」

「家から近い高校に通うことで、通学に要する時間を削り、時間を比較的有効に活用するため。」

少年は感情の無い機械的な声で返答する。

「比較的とは？」

「高校に行くこと自体、無駄と思える行為。」

「成る程・・・なら何故受験を？」

「高校卒業、大学卒業という肩書きを持つことで、将来の生活を可能な限り楽にするため。」

「具体的に楽とは？」

「そこそこの企業に就職できて、生活に困らない程度の金を稼げること。」

試験官は苦虫を噛み潰したような顔をしたが、すぐに気を取り直した様子で次の質問に移った。

「では、今回のペーパーテストは自信がありますか？」

「自身も何もあんな簡単な問題を出来ない奴の気が知れない。」

全国の受験生が聞いたら卒倒しそうな言葉だった。

試験官は頭を抱えなくなった。

こんなにも、自分の思っていることをズバズバ言う生徒は初めてだった。

「では、質問を変えましょう。何か趣味はありますか？」

「一人オセロ。」

「え？」

「一人オセロだと言っている。」

「ああ・・・何故一人で？」

「どいつもこいつも頭の悪いゴミ屑ばかり・・・相手にならん。」

「そうですか・・・」

試験官はやりにくいと感じていた。

試験官の仕事は、定められた質問をして、その返答の様子や返答内容を考慮して点数をつける、というものだが、これはどうした物かと思ったのだ。

返答の様子を見れば、すべて即答、しかもこちらの目を見てはつきり言っている。

これについては点数が高い。

しかし、返答内容が・・・

「ええと・・・少し変わった質問をさせてもらいましょう。人を殺すことについてどう思いますか？」

「頭の悪い愚かな行為。行えば、例え未遂でも生きていくのに何らかの不利益を被るに決まっているのに、行う理由が俺にはわからない。しかし、それは行動そのものについてのことであり、殺人

を行う気持ちは分からないでもない。」

「ほう・・・といいますと？」

「俺も常々思っていることがある。いつそのこと人類が減んでしまえばいい。当然俺も含めて。」

「・・・最後の質問をさせていただきます。これからの高校生活の意義を教えてください。」

「意義なんて無い。俺が俺のために使える俺の時間を情性に無意味に消費するだけ。」

「・・・これにて試験終了です。お疲れ様でした。」

少年は椅子から立ち上がり一礼し、扉の前で再び礼をした。

—ガララララ・・・ガララララ、ピシヤツ—

少年が出て行った後、試験官はドツと息を吐いた。
そして一言。

「ああ・・・疲れた。」

—コンコン—

そして扉が叩かれる。

「どうぞ。」

気を取り直して次の子供に対する面接試験を始めた。

面接試験の話（後書き）

受験生の方、すいませんでした!!

日本国仙法第001条 RR法

時は西暦21XX年。

日本は犯罪数世界一を記録した。

あらゆる人間が犯罪に走り、それによって生活が苦しくなった善良なる一般人が苦悩の末犯罪に走り、それによってまた犯罪に走る人間が増えるという悪循環。

もはや、法律も憲法も、警察すらも力を失った。

この流れを断ち切るため、日本政府は果てしない苦悩の議論の末に一つの決断を下す。

それは『日本国仙法第001条 RR法』。

憲法にも法律にも力がないのなら、として生まれたこの『日本国仙法』は、日本のかつての栄華を取り戻す為の最後の砦だった。

その記念すべき第001条として可決されたのがRR法。

このRR法は犯罪抑制の為にだけに可決された法であった。



「14番!! 15番!! 出ろ!!!」

看守の喧しい声が轟く。

RR法が可決して以来、牢屋に入る人間が圧倒的に増えた。

そして日本の人口が圧倒的に減った。

理由は明らかだ。

このRR法によって犯罪者の運命は二つしかなくなったのだから。無罪放免か死刑、すなわち生か死のどちらかだ。

「グズグズするなあ!!!」

本当に喧しいと思う。

俺は鞭で叩かれる前にさっさと牢から出る。

15番の牢にいた男も出てきた。

そして俺と男は狭い部屋に連れて行かれる。

牢よりも狭く、小さな机が一つあり、その両側に椅子があるだけの部屋だ。

「座れ。」

看守が命令した。

俺は言われなくとも、とばかりに椅子に座る。

相手も座った。

今から何をやらされるのかわからない。

ただ、この部屋から出てくるのは毎回一人だけなのだ。

そして、この部屋から出た人間は無罪放免となる。

どうせ、犯罪者である俺達には人権らしい人権はない。

名前は無く、番号で呼ばれる存在なのだから。

「クックック。お前らのどちらかは、これで晴れて牢屋から出られる。」

看守は気持ち悪い笑みをこぼすと、机の上にコトリとある物を置いた。

それだけで全て理解する。

「わかるだろう？これで生き残った方が出られるんだ。」

見れば分かる。

六発装填式リボルバーの拳銃だ。
つまり……

「ロシアン……ルーレット？」

15番の男が俺より先に言った。

「そうだ。RR法というのを知っているな？」

知っている。

どんなに小さい犯罪でも、例えば万引きでも、警察に捕まれば裁判無しで独房にぶち込まれ、無罪放免か死刑のどちらかにしかならない。

その選別方法のことだ……

このRR法の恐ろしいところは裁判がないことだ。

つまり、冤罪でも独房にぶち込まれる羽目になる。

しかしまさか、ロシアンルーレット(Russian Roulette)とは……

冤罪で死ぬこともあれば、実際に犯罪を犯しているのに無罪になることもあるわけだ。

「では、始める。」

看守が銃の中に弾を一発込めた。

そして、シャーシャーとシリンダーを回す。

これで、弾がいつ出るか分からない。

「では引け。」

俺に渡された。

先行は俺なのか・・・

俺は恐る恐る銃口をこめかみに当てる。

手が震えた。

俺は死刑になってもおかしくない犯罪を犯したというのに、この期に及んで生を掴み取りたいと思っている。
浅ましいことだ・・・

—カシャー—

弾は出なかった。

俺はフウと安堵の息をもらす。

次は相手の番だ。

相手はしばらくブルブルと震えていたが・・・

—カシャー—

やがて覚悟を決めたかのように引き金を引いた。

弾は出ない。

また俺の番。

—カシャー—

俺は躊躇う事無く引き金を引く。

もう死の覚悟は出来た。

引き金を引くのに何を躊躇うことがあると言うのだろうか。

「か、かみさ・・・神様!!」

そう言って目の前の男はギュッと目を瞑る。

「おい！！早く引け！！！！」

看守が男を急かす。

「いやだあ！！いやだあ！！！！」

まるで子供のように喚き散らす目の前の男。
仕方の無いことだと思う。

残り三発の内の一発にハズレがあるのだから。

「う・・・う・・・」

—カシャー—

泣きながら男は引き金を引く。

またしても弾は出ず。

これで俺の死の確立は二分の一。

「看守さん。」

「なんだ？命乞いなら聞かんぞ。」

「そんなんじゃないやしません。もし俺が死んだら、俺の親に一言俺が『済まなかったと言っていた』と伝えてください。」

「何を言っている。お前の親はお前が殺したのだろう？」

俺はハハハと顔だけで笑うと、銃口をこめかみに押し付けた。
そして祈る思いで引き金に指を掛けた。

因果の渦に吞まれて消えろ

意味なき存在

意味ある存在

私はどちら？

意味なき存在

意味ある存在

貴方はどちら？

深く高く静かに消えて

狭く速く気高く消えて

嘯く因果の遡羅の中に

果てる煉咬の帯がある

閃く世界に嫌疑をかけて

知らぬ儀悼を蒼と成せ

猛る偽善は哭くも無し

因果の渦に吞まれて消えろ

価値なき存在

価値ある存在

私はどちら？

価値なき存在

価値ある存在

貴方はどちら？

暗く低く雅に消えて

黒く偏く清楚に消えて

嘯く余映の刹那の果てに

朽ちる孤高の帯がある
散りゆく世界に鎖をかけて
乾く毒杯隻と成せ
狂う死念は哭くも無し
因果の渦に吞まれて消えろ

甲斐なき存在
甲斐ある存在
私はどちら？
甲斐なき存在
甲斐ある存在
貴方はどちら？
酷く汚く醜く消えて
唯に誠に素直に消えて

嘯く輪廻の囃子の欠片
煌く虚空の帯がある
騒ぐ世界に破概をかけて
嘆く仇を劫と成せ
拓く夢幻は哭くも無し
因果の渦に吞まれて消えろ

意義なき存在
意義ある存在
私はどちら？
意義なき存在
意義ある存在
貴方はどちら？

堅く永く煩く消えて
冷たく若く優雅に消えて

嘯く思念の怠惰の上に
蠢く試練の帯がある
舞いめく世界に疑念をかけて
囲む燦然箔と成せ
逸る期待は哭くも無し
因果の渦に吞まれて消えろ

賽なき存在
賽ある存在
私はどちら？
賽なき存在
賽ある存在
貴方はどちら？
明るく知らず密かに消えて
広く険しく愚かに消えて

嘯く妖の背理が高く
願う怪雅の帯がある
囁く世界に失意をかけて
現る来世を克と成せ
狭まる邂逅哭くも無し
因果の渦に吞まれて消えろ

罪なき存在
罪ある存在

私はどちら？

罪なき存在

罪ある存在

貴方はどちら？

誇り気高く真意に消えて

赦し流され走駆で消えて

嘯く真偽を貫く鼓動

憎む罰越え帯がある

蝕む世界に希望をかけて

消える怪事を燈と成せ

奔る大義は哭くも無し

因果の渦に吞まれて消えろ

因果の渦に吞まれて消えろ（後書き）

これ詩やん!!

はい詩です。

別枠で作るのも面倒なんで、ここに入れちゃいました。

彼等

彼等は死んだ。

誰にも悲しまれずに死んだ。

狭く暗い小道の奥でひっそりと死んだ。

誰に知られる事もなく、決して愛されなかった男達が死んだ。

親は彼等を捨て、友は彼等を裏切り、妻は別の男と消え、子供は帰ってこない。

そんな孤独の男達が死んだ。

そこには何も残らず、何の感慨も無い。

ただそれだけの話。

それ故に無視された。

何故彼等が死んだのか。

—ガサガサ—

何かを漁る様な音は、既に“彼等”の中では目覚ましになっていた。

「今日もご苦労なこったねえ」

「ハッハッハ。もう慣れましたよ。」

彼が“彼等”の前に現れたのは半年ほど前のことだった。

ふと、急に現れ、ゴミを漁り始めた。

“彼等”は自らの陣地を侵されたと憤り、すぐにでも追い出そうとしたが、彼はそこから逃げなかった。

何を思うところがあったか分からないが、とにかく彼はここに現れたのだ。

「毎回訊くけど、何でここに来たんだい？」

「ハハハ・・・」

何度問うても、彼は表情だけで乾いた笑いを返すだけ。

“彼等”も深く問いただしはしなかった。

「それでは、さようなら。」

そして彼は去り際、こんな事を言って去る。

不思議な事に、一切合財何も持ち帰りはしないのだから不思議でしようがない。

「はて？ 今日何も持って帰ってない・・・」

それが“彼等”にとって不思議でしようがない。

もっとも、彼が何も持って帰らないから、“彼等”も彼を追いつ出すのをやめたのだが・・・

そして翌日の事

—ガサガサ—

再びあの音。

よくもまあ毎日々空きもせずに同じ時間同じ場所でゴソゴソと・・・

「やあおはようさん。」

「どうも、おはようございます。」

その時、“彼等”ふと感じた。

何かが違う・・・と。

「よくもまあ飽きないねえ。」

「ハハハそうですね。でも、これで最後です。」

これで最後。

その言葉は“彼等”に不思議な感情を起こさせた。

それを明確に『寂しい』と感じる者もいれば、『喜び』だと感じる者もいた。

「フッフ。では、さようなら。」

そして“彼等”は聞いた。

彼が『作戦始動』と呟くのを・・・

「苦・・・しい・・・」

息も絶え絶えに呟く男がいた。

もう“彼等”のほとんどは死滅し、残った一人の命の灯火も消えようとしている。

結局、何があったのか分からない。

“彼等”の人生は最後まで悲惨だった。

親には捨てられ、友だった人間には裏切られた。

“彼等”はそんな人間の集まりだった。

妻がいた者もいた。

しかし、あっさりと他の男に取られた。

子供がいた者もいた。

家には帰って来なくなってしまった。

「何で・・・何で・・・」

“彼等” そんな孤独な者たちの集まりだった。

お互い不幸な境遇を嘆き、それでも支え合って前を向いて行ける者達の集まりだったはずだ。

「何でだよ・・・」

そして、最後の男も死んだ。

“彼等” は最後まで報われぬまま、その生涯を閉じたのだった。

「害虫駆除完了。」

「ご苦労だったな。」

薄暗い部屋で何事かを囁く二人の人間がいた。

「奴等こと“彼等”はこの国に巢食う害虫だ。そうだろう？」

「そうですね。奴等のようがゴミ屑がいるから、我が国の経済は破綻するのです。奴等は国の為に死ねたのですから、今頃天国にでも行っているのではないですか？」

「愉快の事を言う。それでは我らは地獄に落ちてしまうのではないか。」

「ハッハッハ。まこと冗談が上手いですな。」

「「ワッハッハッハ」」

二人は腹の底から笑いあった。

「この調子で害虫駆除を続けてくれたまえ。」

「もちろんです。この調子で続ければ、必ずや我が国はあの

輝かしい全盛期を取り戻せるでしょう。」

「それは楽しみだ。」

「はい。全ては我が国“日本国”のために。」

苛めと反撃（前書き）

いじめは犯罪です。

絶対にしないようにしましょう。

苛めと反撃

「やゝい、トンマー!!」

そう言われ、頭から水を被せられた。

「うわ!汚!!」

「こっちに近寄らないでよ!」

「こっちを見るなよ。気持ち悪いな。」

そんな風に言われるのは日常茶飯事になっていた。

「はっ!」

そう吐き捨てるように言う。

所詮頭の悪い馬鹿餓鬼どもの戯れにいちいち悔しがったりなどして
いられない。

「それがどうした?頭の悪いゴミクズ共の言葉なんて俺の心
に一ミクロンも届きはしない。」

そう言い捨ててやった。

「なんだよ生意気だな。」

そう言われ、座っていた椅子を蹴られた。

絶妙に椅子が俺の尻の下からずれ、俺はドスンと尻餅を突く。

「アッハッハッハ!」

それも見てクラス中から大爆笑が起こる。

俺はそちらには一瞥もせずに椅子を拾い、元の場所に戻る。大概のいじめをする輩というのは苛められている人間が悔しがったりするのを見て喜ぶ。

ならば、どんな苛めに対しても無反応を突き通せば、苛めの楽しさは半減する。

そう考えて、今までやってきた。

苛めが緩くなる気配は無いが、今更そのスタイルを変えるつもりは無い。

「フウ。」

一つ溜息をつき、事の発端を思い出す。

あれは一年前の事。

本当に真面目に頑張っただけだった。

中間テストで全教科満点をとった。

あまり頭が良くなく、今までの成績は赤点スレスレで本当にヤバイと思ったからこそその努力だった。

最初は友人は祝福してくれた。

褒め称えてくれた。

でも、大人はそうは思わなかったらしい。

「お前、カンニングしただろう？」

当然していない。

しかし、噂が広がるのは速い物だ。

それを聞きつけた一人の男子が学校中に広めた。

それ以来、苛めの対象となり、友人には見捨てられ、いつしか学校で孤立した存在となっていた。

カンニングしたと思い込んでいる教師はそれが当然の報いだとかばかりに、苛めに対して何の助けもしてくれなかった。

俺は学校で本当に孤立してしまったのだ。

それだって、別に何ヶ月もすればカンニングした事などどうでもよくなる。

しかし、俺が苛められる空気というのは、俺がいなくならない限り永遠に続く。

苛められっ子には独特の空気があり、それは殆どの場合、一生覆らない。

「フゥ。」

もう一度溜息。

当初こそ泣き叫ぶほどに苦痛だったそれも、今となっては日常の中に溶け込んだ。

俺にとって苛められている状況こそが日常だ。

「何呟いてんだよ気持ち悪いなあ!!」

こんどは脇腹をゴスツと蹴られた。

「グフツ。」

それが痛くないはずが無く、俺は脇腹を抱えて蹲る。

それを見てゲラゲラと笑うクラスメイト達。

今日はいつもより酷い。

今までの中でも直接的に攻撃されたのは初めてだった。
こうやって、その内苛めが殺人になるようだ。

「ちょうどいいや死んでしまえ！」

「そうだなお前なんか生きてる価値ないもんなー!!」

「ゴミ！」

「廃棄物！」

「息をしているだけで不愉快だ！消えろ!!」

そして何人もの人間にドスドスと蹴られる。

「もう駄目だな。」

そう俺は呟いた。

精神的な苛めに対してはどれだけでも我慢できるが、肉体的な苛めに対しては不慣れな分我慢が出来なかった。

「何言ってるんだよおまブツ!!」

その男子は顔面で拳を受け、数メートル吹き飛び動かなくなった。

「え？」

動揺する生徒達。

しかしもう俺は赦すつもりは無かった。

「お前らはやり過ぎだよ。」

そう呟くと、すぐ近くにいた男子の首を掴みロッカーに頭から叩きつける。

気絶したのを確認すると、今度は隣にいた女子の右腕を掴み、躊躇い無く骨を折った。

「イヤアアアア！！私の腕が！！！」

骨が折れるほどの重症はその瞬間には痛みを殆ど感じない。

故に叫ぶ程度の元気はある。

すぐにその女子を蹴飛ばし、今度はやや離れた場所にいた男子の髪の毛を掴み引き寄せ、やはり躊躇い無くその両目に二本の指を突き刺した。

「このっ！」

流石に呆けていた男子が活力を取り戻し、俺を制圧せんと襲い掛かってくる。

三人同時に襲い掛かってきたが、俺は全く動揺せず、まずは一人殴りかかってくる拳を取り、背負い投げの要領で投げ飛ばし、そのまま巻き込んで腕の骨を折る。

二人目にはまず殴られてしまったが、それで距離を取り、ちょうどよく机の上にあったカッターナイフを取って、二人目の太ももに突き刺しすぐに引き抜いた。

そして三人目、すでに怯んでいたが、それでも俺はそいつの腕を取り小手返し。

地面に寝転がして、首元にカッターナイフの刃を当てる。

「切裂いて欲しいか？」

当然ブンブンと首を振る。

「そうだろうな。まあ俺も退学になるのは御免だからな。こ

れはお前らが喧嘩し合っとうなりました、って証言しろ。俺はこの事件には一切無関係です。わかったか？」

あまりにも信じれない交換条件に男子は悩んだ素振を見せたが、冷たいカッターの刃が首に押し付けられ、男子は必死に首を縦に振った。

「さて、他の皆さんわかりましたか？」

クラスメイト達は鬼でも見るような目で必死に頷いていた。

「いいでしょう。」

俺は男子を解放した。

「さて、」

そう言っ俺はポケットからあるものを取り出す。

「実を言うのですね、俺は苛めの当初から君達の言葉は全て録音してあるんですよ。人格を傷つける暴言ってね。」

そう録音機である。

「当然、俺を殴ったり蹴ったりした音も入ってる。ああ、安心しろよ。俺の声は入っていない。編集したからね。つまり、俺は暴言に無言で堪える健気な男子生徒というわけだ。」

俺はクックと笑う。

「今からこれを校長先生と教育委員会の方へ持って行って直訴する。さて、何人が退学になるかなあ？」

「そんなことしたら、俺はお前が今やったことを全て話す。」

「俺が何をやったって？証拠でもあるのか？見ての通り俺は手袋をしている。どこにも俺の指紋なんて無い。そしてこの惨状はお前らが喧嘩しただけ。そうだろ？」

俺に齒向かってきた男子以外の全員が首を縦に振った。

「う・・・」

「もし、俺が退学になるなんてことがあったら、その時は何があってもこのクラスの人間を皆殺しにしてやるからそのつもりだな。ハッハッハ！」

そして俺は教室を出る。

俺以外のクラスの人間全員が退学を喰らい、何人かの教師に懲戒免職が渡され、学校が潰れた高二の夏。

苛めと反撃（後書き）

苛められる人間は時に信じられない反撃をします。

苛めていた人間が苛められていた人間の反撃によって殺されたなんて事件もザラにあります。

皆さん、苛めはやめましょう。

この物語の人達みたいになりたく無かったらね（ニヤリ

漆黒の部屋（ブラックボックス）（前書き）

ホラーです。

刺激の強い描写があります。

ホラーの中でも気持ち悪い系が苦手な人は読まないほうが良いと思います。

漆黒の部屋（ブラックボックス）

「ここ・・・どこだ？」

気付いたらそこに立っていた。

それまでの過程など一切覚えていない。

本当に気付いたらここに立っていた。

「なんだ？」

そこは黒。

上も下も右も左も前も後ろも全てが黒。

「ん？」

よく見ると、その黒は何やらもぞもぞと動いている。

見るだけではよく分からないので、男は下の黒い部分に触れてみた。

ーガサガサー

本能から怖気を誘う気味の悪い音。

男は覚悟を決めてその黒を軽く手で払ってみた。

ーザァー

「うげ！」

それはゴキブリだった。

その瞬間、部屋を漆黒に染めていた大量のゴキブリの集団が一斉に動き出した。

「うわっ!!」

ビックリして足を振り上げ、そのまま振り下ろしてしまった。

—グシャー—

ゴキブリがその足の裏で何匹か潰れ、その感覚が何故か裸足であった足の裏を伝って脳まで届いた。

しかし幸か不幸かその気持ち悪さを感じている暇は無い。

ゴキブリはブンブンと飛び回り、男の体に張り付き、服の中に入り込み、自由勝手にはいずり回る。

下からも足を伝ってゴキブリはどんどん男の体を登り、髪にもう何匹かゴキブリが絡まっている。

「う、うわああああ!!!!!!」

男は狂ったかのように腕を振り回し脚を振り回し、できるだけゴキブリを近づけないように暴れた。

—グシャーグシャーグシャー—

その過程で何匹もゴキブリが潰れたが、男は気にしなかった。

否、気にしている余裕など無かった。

ひたすらに暴れ振り払う。

しかし、

「うわ!!」

—グチャー—

男は脚を引っ掛けて転んでしまった。

その大きな体に何十匹ものゴキブリが一気に押し潰される。

「うわああああ!!」

妙に生暖かく、湿気を感じる背中を見る気がしなかった。

一気に気持ち悪さから飛び上がり、後下がる。

ーグシヤグシヤグシヤー

また何匹も足の裏で潰れる。

バン!と壁を叩いた掌の下にはやはり何匹ものゴキブリ。

男はヘナヘナと力無く座り込む。

男はすでに失禁していた。

しかしゴキブリの勢いは止まらない。

また男の体に絡みつき、体を這い回り、そして口の中にも入っていく。

「オエッ!」

男はゴキブリが口の中に入って、恐ろしい不快感に襲われ、口を閉じてしまった。

ーグチューー

ゴキブリを噛み潰し、なんとも甘苦い濃厚な体液が口の中に溢れ、喉の奥へ流れていく。

「ウゲエエエエ!」

男はもう我慢できず、口の中から嘔吐と共に、汚物を吐き出す。ゴキブリはその汚物に群がり、それを纏って再び飛び回る。そして男に群がり、男の全身を擦る。

「う・・・」

ーグシャー

男はついに気を失い、顔面からゴキブリの群れへ倒れこんだ。意識を失った男の口の中に何匹かのゴキブリが入り込み卵を産み付ける。

そしてその瞬間、体力のゴキブリが口の中へ入り、気管を通して肺まで行き、肺を荒らして穴を開け、男は窒息して死んだ。何日か後、男の体は腐敗し、新たなゴキブリが大量に男の体から生まれてきた。

「ヒ、ヒィー！」

そしてまた新たな犠牲者がこの部屋に。
さあ今も貴方を待っている。
静かに、ふと急に、突然この部屋に招かれる。
この部屋の名は『ブラックボックス漆黒の部屋』。

漆黒の部屋（ブラックボックス）（後書き）

自分で書いてて鳥肌が立ちました。

次は爽やか系な短編にしようと思います。

うおう・・・エンガチヨ。

平均的な男（前書き）

面白いかどうか？と問われたら、断言します。
絶対に面白くないです。

平均的な男

俺の名前は『阿部玲人』あべれいじという。

俺は何かと普通じゃない。

なぜなら！この短編集の中で、なんと！初めての名前があるキャラなのだ！！

「そんなことで喜ぶお前は平均的だ。」

そんなことを俺に言ってくるこいつは某小説家。
やなぎじょうこ、とかいう変態野郎だ。

「柳条湖をそうやって読むお前が平均的だ。」

それ以外に読み方があるのかよ！！

グロい小説ばかり書きやがって。

爽やかな恋愛小説とか書けないのかよ！！

「そこで爽やかな恋愛とか言っちゃうお前は平均的だ。そしてこれは『やなぎじょうこ』ではない。『りゅうじょうこ』だ。『リウティアオフ』とも読む。中学の勉強でも、その辺りをしっかりやらないお前は平均的だ。」

そんなことやった覚えがねえよ。

「忘れるお前は平均的だ。」

なんでだよ！

こんな風的作者と対談できるキャラなんて俺だけだろうが！！

「そんなこと言っちゃうからお前は平均的なんだ。」

うぐぐ・・・

この・・・馬鹿野郎！

「暴言すらも平均的な。もっと、虫唾が走る、とか、存在が鬱陶しいんだよ！とか言えないのか？」

消えうせろ！このハゲ！！

「ああ駄目だ。ハゲは平均的だ。」

俺は高校二年生。

「いきなりなんだ？まあいいさ。高校二年生は平均的な。理由を説明して欲しいか？」

いらんわボケ。

「ちなみに、身長168センチ、体重65キロ。むっちゃ平均的やん。」

俺のパーソナルデータばらすなよ！！

「その言い方が平均的だ。」

だいたいお前は何が言いたんだよ！！

「お前の存在がアベレージだと言いたい。」

もうええわ。

「どうも有難う御座いました。」

って漫才やってたの？

「そのツツコミも平均的だ。」

鬱陶しいわ!!

「平均的じゃのう。」

もう相手してられん。

じゃあな!!

「そうやって一方的に打ち切って逃げるのも平均的だ。」

平均的な男（後書き）

まあ休憩みたいな章です。
遊びです。

あまり深くは考えないように。

モテない男の話（前書き）

うゝん。

男が読むと泣けます。

要注意（笑）

モテない男の話

「死ぬまで俺に付いて来い!!」

男は女に背中を向け、逞しく男らしい低い声で言う。

しかし震えるその声には恥じらいを感じ、なんとも微笑ましい風を露呈している。

「断固拒否します。」

女は答える。

その高く、聞くだけで全身の産毛が鳴く艶ましい声にははっきりと否定の意志が籠っていた。

「よしそうか！行け！！」

「そうさせて頂きます。」

そして女は男の脇を駆け抜ける。

男は一切微動だにしなかった。

女が去った後、男は人知れず涙を流した。

一粒ずつ頬を伝う男の涙。

ポツリポツリと地面に落ちては弾けて消える。

喉の置くから延々と出続ける嗚咽を歯を食いしばって、それでも堪えきれずに少しずつ出てくる嗚咽を飲み込もうと必死になる男。
耐え切れない悲しみをそれでも食い縛って耐える男泣き。

男は一時間以上そこに立っていた。

「好きです！付き合ってください！！」

「ごめん無理！！」

はつきりと、あまりにはつきりと拒絶の意を示した彼女は逃げるように走り去っていった。

ガラガラと開け放たれた扉がピシャリと閉まった。

「そんな・・・」

男はその場に崩れるように両膝をつき、うなだれた。

勇気を振り絞ったと言うにも生温いほどに、全身からありったけの勇気を掻き出した男の告白は、あまりにも無惨にあっさり切り捨てられた。

「ひどす・・・ぎ・・・るよ・・・」

自然と男の目に涙が溢れる。

「うう・・・う・・・うう・・・」

悲しみに混じる嗚咽の声はしばらく響いていた。



「君と一つになりたい！！」

男は両手を広げ、さあ胸に飛び込んでおいで、とでも言いたげに構えてみせる。

「嫌よ絶対!！」

—ドゴォ・・・グシヤ—

女は男を拳で殴り倒し、倒れた顔を思いっきり踏んでから去って行った。

「チクシヨウ・・・」

男を頬を濡らすのは殴られた痛みでも踏まれた痛みでもない。



「例え全世界を敵に回しても、僕は君の味方だ!！」

男は守るように女を自分の背中に隠す。

「とりあえず私があなたの敵になるわ。」

そう言った女は男の背中の中から出て、どこかへ走り去った。

「そん・・・なのって・・・ないだろ・・・」

目からとめどなく溢れる汗を止める術はなかった。

☆

「俺は死んでも君だけは守る!!」

「守ってくれなくても良いから今死んで。」

「キン!!」

女は男の急所を蹴り上げ、男はうずくまる。

「ふん!百年早いのよ!若造が!!」

通り様に唾をペツと男に吐きかけて女は去った。

「うう・・・ううう・・・」

どれほど屈辱を受けようと男は泣きはしない。

どれほど悔しくとも男は涙を飲み込んでみせる。

ならば、今流す涙はどれほどに悔しかったのだろうか。

否、悔しくなど無い。

ただ悲しいだけだ。

☆

「俺の味噌汁を毎日作ってくれ!!」

「インスタントを作れば?」

女は男の脇を駆け去った。

「インスタントじゃ不味いんだよ・・・」

男は拳で壁を叩く。

その嗚咽が誰にも聞こえぬよう、力いっぱい壁を叩いた。

モテない男の話（後書き）

一応断っておきますが、この話の主人公である『男』は作者ではありません。

消える人達

「・・・誰？」

激しい雨が降っていた。

ザーザーと視界が悪いほどに。

「お前・・・誰だよ。」

そんな大雨の中、急いで家に帰ろうとしていた男の前に人影が立ちほだかっていた。

「お前は一体・・・誰なんだよ!？」

雨のせいかな、夜の暗闇のせいかな定かではないが、輪郭はぼやけ、表情に至っては全くわからない。

男の前にいるのはまさしく“影”だった。

「夢幻にして深淵、幽玄なる饗宴、彼方への旅路、虚空へと誘い、死を迎えよ」

その“影”は言葉を発す。

低く掠れて、不気味なのに脳髓に染み込んでしつかりと聞こえる女の声であった。

「え?何?」

それでも聞こえなかったのか、それとも“影”の発した言葉の意味が判らなかったのか、今となっては定かではない。

男のさしていた傘がコロコロと転がり、男と“影”はそこらになくなっていた。



そこは雑踏。

数え切れないほどの人間達が行き交う交通の中心。

「痛ってえな!!」

肩がぶつかり、男は荒げた声をぶつかってきた女に向けた。

「それはすいません。何分急いでいたもので・・・」

女は素直に謝るが、その女性が異様なほどに美人だったのを見て、男は良からぬ事をたくらむ。

「なあ姉ちゃんよお。世の中そんなに甘くないんだわ。」

一人のチンピラが女に絡む。

そんな風景は当たり前になり過ぎ、周りの人間は見て見ぬフリをするどころか、本当に見すらしない。

「謝って済むなら警察はいらんですよ。」

警察が関与する必要のない小さいいざこざを解決する為に謝罪という物はあるのだということを、男は冷静に頭に残してあるが、意識の外に強引に追い出していた。

「私にどうしろと？」

「素直で良いねえ。ちょっとあっちの方でお話しようか。」

そういつて男は路地裏の狭い通路のような所を掌で指し示す。

「チツ。だから屑は嫌いだ。」

女が呟いた何かは男の耳には届かなかった。

無数に人が行き交う雑踏の中、一人のチンピラが消えたことに誰も気付かなかった。



「ヒイ・・・助けてくれ！助けてくれえ！！」

男は顔は涙と鼻水でグシャグシャになりながら、それでも自分の命を救うことを目の前にいる女に懇願する。

そこは狭い路地裏。

周りは高いコンクリートの壁に囲まれ、人はおらず、音も人のいるところまでは届かない。

「別に殺したりはしない。」

異常なほどに残酷な顔をした女の口からそんな言葉を聞いても、男が安心できるはずがない。

「ヒツ・・・ヒイイ！！」

男は失禁し、腰を抜かし、それでも必死に女から距離を取ろうと後ずさる。

「なぜだあ！なぜなんだあ！！」

「理由？なんだそれは？それは今必要な質問か？」

女の残酷な一言。

その後、男はその場から消えうせ、

「これで全員か？あのチンピラも対象の一人だったとは・・・
幸運だったな。」

女は呟き、その場から消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6077d/>

柳条湖流連載式短編集

2010年10月12日19時53分発行